



第45号

(発行所)

真宗大谷派

松岡山 廣讚寺

中村区城屋敷町3-30

TEL (052) 411-5301

FAX (052) 411-5341

携帯 090-1568-4623

E-mail: kousan-temple@trad.ocn.ne.jp

師走

年末を前に今年を振り返ってみる。

今年も、『無常』ということに染みて感じた年であった。

無常とは、この世の一切のものは常に生滅流転（しよめつるてん）して、永遠不変なるものなし。

無常ということ、私なりの解釈をするなら、私の周りには目まぐるしく変わっていく。と同時に私自身も変わり続けているということ。

変わらぬ毎日を過ごし、あつという間に年をとった。この、「あつという間」という時間。過ぎ去った時はもう取り返しのつかない時になっているということを実感する貴重な機縁を今年にいただいた。

桜の花が散るのと同じように、いつか人と別れることになることは知ってはいるが、また明日も会えると当たり前と思う愚かさを。

『嘘』のような『ほんと』の話

伊藤和美

平成二十三年秋彼岸に、廣讚寺若任職の進めで四人の方が、帰敬式を受けお釈迦様の弟子となられた。

この四人の方は、一人が城屋敷町で三人は大治町。なんの関係もないように思われるが、江戸時代には隣に住み、親戚^{せき}どうしであった。

住んでおられた場所は、稲葉地村字六石である。この字名については、廣讚寺ジャーナル二十四号に記載してある。この六石には三軒の家があり、全家秋田姓である。そのうち一軒が明治末期に稲葉地村字中瀬子に移転した。現在の城屋敷町である。

ちょうどそのころ、隣の娘さんが大治村花常に嫁入りました。その嫁さんの次世代の方が帰敬式を受けた大治町の三人の方である。

字六石にあった残りの家は、大正時代に下萱津村に移転した。残った六石神明社は、昭和三十四年の伊勢湾台風で流失し、今は古い大木が残るのみである。

江戸時代から明治にかけて、隣に住み親戚どうしの方が、何も知らずに一枚の写真におさまってござる。

一部分、中村歴史の会発行の稲葉地村を参考にした。

おわり

悲惨な東日本大震災も八カ月を過ぎ、東北は厳しい冬を迎えようとしています。

被災地の最近の話題といえば、私の住む宮城県でも、十月、石巻市の町の避難所が閉鎖になり、十一月に入り女川町の避難所が閉鎖、気仙沼に一部残るだけになりました。

避難所の閉鎖後は基本的には仮設住宅に移るといことです。テレビ等の報道は仮設住宅に入居して一段落という論調ですが、これから復興のための自立した生活が厳しく待ち受けているのが現実だと思えます。また、どちらかという、今の時期まで、避難所に残っている多くはお年寄りら、生活弱者の方々のようにも見受けられます。また、すでに仮設住宅にお住まいの方も高齢者の方が多く、日中、お伺いしても、部屋の中からほとんど出られず、仮設住宅の周りは人の気配もなく静かな空気が目立ちます。

今回の東北の特に三陸沿岸地区の仮設住宅は津波を逃れ、大抵、高台というか山あいに建てられました。お店も無い、交通手段も車しかないようなところで、私自身、

津波被害以前の町



何度か現地をお伺いして実感しています

が、特に高齢の方の

独り暮らしはなかなか大変な生活をしなくてはならない環境です。そんな中で、テレビのニュースに、石巻の避難所を最後に出られる八十歳のおばあちゃんの姿がありました。身内の方を津波で亡くされ、一人で仮設住宅に移る姿でした。そのおばあちゃんの心細い、寂しい顔を見た時、ふっと自分の母の事を思い出しました。お寺さんや近所の人に大切にされて城屋敷で独り暮らしだった母は、三年前の十一月の冷え込んだ夜に玄関の鍵をかけ



山田町 織笠地区(大槌町の隣町) 9/26撮影

町長以下職員六十名消息判らず
(岩手県大槌町役場) 9/26撮影



ようとしてそのまま他界しました。お蔭さまで廣讚寺様、阿弥陀様のお支えにより、お浄土に渡ることができたと思いますが、寂しく母を独り旅立たせたことについては、いまでも母に申し訳なく、阿弥陀様に手を合わせております。

話は戻しますが、そんな中、仮設住宅でも、そんなお年寄りを支援しようとする動きも出てきております。写真は、岩手県大槌町でパンの小売店をしていた店主とプレハブ店の前で撮影したものです。店自身も津波ですべて流されましたが、仮設住宅に暮らしながら、仮設住宅内に皆に請われて写真のようにプレハブの店を七月に開



きました。この十月には移動販売車で山あいの他の仮設住宅を回り、遠くに出不れないうお年寄りに喜ばれています。家の外に出られないお年寄りには玄関先まで出向き、注文を聞き、届けるということも多々あるということですね。行政とか、他の土地からのボランティアとか、いろいろ支援の仕方はあると思いますが、最後は地域の地道な助け合いが、心や生活を支える大きな力になると改めて感じました。廣讚寺様を中心とした集まりの皆様も、普段は楽しい集まりでも、何かの時は、きつと強いきぎぎなどで結ばれ、助け合いの心で行動できるものと確信しております。

岡田逸朗

陶淵明の詩

人生無根帯・瓢如陌上塵

分散隨風轉・此已非常身

（人生は根なし草であり、人生は塵のようなものだ
塵は風に散らかつてゆく。人間は常にある身ではない）

今年三月十一日の東日本大震災・津波・放射能被害後の大惨状をテレビで眺め、以前学びました漢詩を思い出した。つくづくとこの世の無常を知らされました。

しかし私たちはこの世に生を受けた以上は、人生をより有意義に人々が手を携え合って、喜怒哀楽を共にしながら生きてゆかねばならないという教訓を、この大災害に学んだような気がします。

つらつらと 唐詩想ほゆ 春の地震なる

恵女

行事予定

十二月二日(金)～四日(日)

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要

十二月十日(土) 七時半 同朋委員会・例会

(役員は七時)

十九日(月) 二時～四時 学習会

二十八日(水) 十時 二十八日講・女人講

三十一日(土) 三時 歳末勤行

十一時半

～十二時半まで 除夜

一月一日(祝) 十時 修正会

十四日(土) 七時半 同朋委員会・例会

(役員は七時)

十九日(木) 二時 学習会

二十八日(土) 十時 二十八日講・女人講